

【特集】

IAML 国際大会 2013 報告

July 28 - August 2, 2013 in Wien

特集 <IAML Vienna 2013>

IAML 国際大会 2013 報告	金澤正剛
文化の伝承と未来への展望を見据えて	荒川恒子
IAML ウィーン国際大会に参加して	寺本まり子
20年連続参加の IAML 2013	藤堂雍子
初めての国際大会	大和絃子

IAML 国際大会 2013 報告 — 機構改革の動向を中心に —

金澤正剛

2013年度のIAML大会は、昨年7月28日（日）から8月2日（金）にかけて5日間、ウィーン大学を会場として行われた。ただしウィーン大学と言っても、ショットテール広場に面した歴史的な本館ではなく、それよりも西に10分ほど歩いたところに建つ、旧大学付属病院の建物を改造した新キャンパスの中庭に建てられた「Hörsaalzentrum（中央講堂）」という、周囲の雰囲気とは全く合わないモダンな建造物の中で、大部分の会合が行われたのであった。着いてみて驚いたのはその新キャンパスが極端に広いことで、しかも周囲が延々と続く白色の3階

建ての建物で囲まれているため、どこから入って良いのかもすぐには分からず、目的の会場にたどり着くまでに小一時間を費やしてしまった。

昨年の夏の暑さは東京ばかりでなく、ウィーンでも続き、歴史上最高の記録を残した日が出るほどであった。幸い会場は空調完備であったため、大いに助かったし、休憩時間にもそのまま会場にとどまっている人が多いことが目立ったように思う。日本からは私のほかに荒川恒子副支部長、武蔵野音大の寺本まり子さん、藤堂雍子さん、昭和音大の大和絃子さんの4人、それにカナダのマギル大学所属の藤永一郎さん、ベルギーのブリュッセル在住でカリヨン奏者の松江万里子さんが加わって総勢6人となった。



ウィーン大学構内

今回の大会では会の運営に関していくつか重要な決定があったが、中でも特に重要な決定が2つ行われた。ひとつは今年が選挙の年にあたるため、会長をはじめ新しい役員会 (Board) が選出され、新しい運営体制が決定したこと。そしてもうひとつは従来の IAML の機構を見直して、新しい機構に移行することが決まり、来年の大会に向けて規約改正の案を検討することが合意されたことである。

新しい役員会を決めるための会長と副会長の選挙は、今回から電子投票で行われることになり、それもまた新しい試みであったが、結果は満足されるものだというので、今後もその方針で行われることとなった。ただし、どうしても電子投票が馴染まないという会員には、その他の方法も開かれているので、そのことも注目しておきたい。ところで今回の投票では、会長の候補が RILM の編集長を務める Barbara Dobbs Mackenzie さん (ニューヨーク) 唯一人だったので、実質的には信任投票ということになった。一方副会長には 5 人の候補者の中から、ブリュッセル王室音楽院の図書館長 Johan Eeckeloo、イギリス及びアイルランドの IAML 前支部長 Antony Gordon、モントリオールの大会を成功させたマッギル大学の Joseph Hafner、クラクフ (ポーランド) の Jagiellonian 大学音楽学研究所の Stanislaw Hrabia の 4 人が選ばれた。他に事務局長は今までの Pia Shekhter が留任するが、会計はこれまでの Kathy Adamson に代わって Thomas Kalk (デュッセルドルフ) が務めることとなった。以上 7 人に、前会長の Roger Flury が加わって、新しい役員会 Board が構成されることとなる。

機構の見直しに関しては、いささか分かり難いところもあるので、これまでの背景を含めて、少々詳しく説明しておきたい。現行の会則によれば、会の活動と運営は 3 つの機構によって行われている。それはすなわち総会 (the General Assembly)、評議員会 (the Council)、役員会 (the

Board) の 3 つである。総会は会員全体によって構成され、会の最高議決機構である。一方役員会は、評議員会の決定を実行に移す執行委員会である。それらに対して評議員会は部会の代表者の集まりで、会の方針を先導し、活動を決定する機構であるとのことであるが、少々あいまいで分かり難い。さらにその構成員であるが、投票権を持つ評議員と、そうでない評議員に分かれる。前者に属するのは会長、副会長、前会長とそれに先立つ最後の元会長、10 人以上の会員を擁する各国支部の代表、それに特定の委員会や専門団体の議長らである。これに対して、事務局長、会計、特定以外の委員会や団体の議長は、評議員会のメンバーではあるが、投票権は持たない。

以上の構成を簡単に言うと次のようになる。会の方針、具体的な活動は評議員会が決める、それを総会に諮って了承を得た上で、役員会が実行に移す。これは IAML が発足した当時においては、至極合理的な機構であったものと思われる。つまり初期の IAML においては、会の方針を決め、具体的な運営を企画する人々によって評議員会が構成されていた。彼らが決定したことを総会に諮り、了承を得た上でその実現を役員会が行った。

ところが時間が経ち、会が次第に大きくなっていくうちに、この機構に支障をきたすようになった。問題は、肥大化した評議員会が会の先導役を務め、会の方針運営に関する具体的な提案をまとめることが出来なくなるようになったことである。そこで最近では、評議員会と役員会の両方に重複して務める会長と副会長が中心にまとめた案を評議員会に提示して了承を得た上で、総会に諮るという過程を踏むようになった。さらに大会における評議員会の会合には、発言権や投票権は無いものの、その気があれば会員は誰でも出席できることになっている。このため大会における評議員会の会合

と、総会の会合の内容が、ほとんど同じものとなるようになった。すなわち実質的にはほとんど同じことを、重複して2度行うようになったのである。これは労力と時間の無駄なので、2つの会合を一本化してはどうか、ということから、今回の機構の見直しが始まった。

もっともこれまで評議員会においては、各国支部代表の報告と提案という、総会では行わない重要な部分があった。ところがその部分が最近次第に形式化して、口頭による発言はあまり意味をなさないようになってしまったのである。それは一つには支部の数が増えたことにもある。従って各支部代表の発言は短時間に限らざるを得なくなってしまう。最近では各代表の発言は3分に限り、とまでになってしまった。そうなると発言の内容も限らざるを得なくなる。現時点での支部の会員数は幾人、会合は何回、会誌やニューズレターの発行は何回、あと詳しいことは配布資料を見て下さい、ということになってしまった。支部から何らかの提案がされる場合でも、前もって会長や副会長と協議し、提案もむしろ会長が行うようになった。それならば各支部の報告は口頭で長々とやるよりは、大会に先立って会誌などで発表した方が合理的ではないか、ということにもなった。

そこで今回新しい機構を提案するにあたっては、前もって各支部代表と役員会が集まって、十分討論しようということになった。この会合は外部の人を入れずに、いわゆるクローズド・セッションで行われたため、忌憚のない発言が相次ぎ、それぞれの本音も聞かれて興味深かったが、結局は大部分が新しい機構に移ることに同意した。そこでそれ以後に行われた2回目の評議員会と総会の会合で、新しい機構への移行が提案され、了承された。それによれば従来の評議員会を諮問委員会 (Advisory Committee) に変え、実質的な会の運営は総会と役員会が行う、ということになる。つまり従来の3層機構から、2層機構

に移行することとなる。しかしこれには会則の変更が必要となるので、次回の大会までに変更案をまとめ、それを総会で討議することとなった。

以上、機構の見直しに関してかなり詳しく説明したが、これは大切なことなのでなにとぞご容赦願いたい。この際会員の皆様にとっては、IAMLの機構に関して良く知っていただける絶好の機会かとも思う。いずれにせよこの新しい提案は、IAMLの歴史がひとつの重要な転機を迎えたことを示しているように思う。

このほか大会の内容や雰囲気に関しては、他の参加者の報告もあるので、詳細はそちらに譲りたい。ただし私自身としては、特筆すべき発表やシンポジウムには出会わなかったような気がする。久しぶりに訪れたウィーンは以前よりも清潔で美しく見え、特に交通機関が改良されたのには目を見張った。ただし名物のヴィーナーシュニーツェルが、特に仔牛と指定しないと、ポークやチキンで代用されて出てくることにはびっくりした。しかし市内の各所に緑がひろがり、公園を散歩して、街角のカフェでくつろぐのは昔のままである。旧市街をさまよい歩き、変わることはないウィーン気質に接して、やはりここは歴史の町であることを痛感した数日であった。



ウィーン王宮

文化の伝承と未来への展望を見据えて

IAML Vienna 2013

荒川 恒子

「音楽の都ウィーン」という言葉もあまり聞かれなくなった当今ですが、久し振りに往年の都を訪ねてみたい、今の様子を実感したいという想いが緋い交ぜになり、滞在期間を前後長めに設定しての参加でした。ウィーンらしさが失われてしまったとよく聞きますが、本当でしょうか。なお今回どうしても見学したかったのは楽器博物館です。確か王宮 Hofburg の中にあるはず、とホテルで訊ねましたが、当然そんなものは観光名所には入らないのです。その代わり、楽器がみたいならと案内され、半信半疑で訪れたのは、技術博物館 Technisches Museum でした。折しも好評につき、ロボットの展示会が延長され、若い人達で賑わっていました。そしてその最上階に、技術博物館の名に恥じない、オーディオ機器や電子楽器の発展の歴史が示されていました。私にとって特に面白かったのは、19 世紀のウィーンでのピアノ産業の隆盛を物語る楽器の数々でした。ヴァルター、シュタイン、シュトライヒャー、グラーフ、ローゼンベルガー、ベーゼンドルファー等、有名どころはともかく、名前も知らないメーカーが、こんなにも沢山、技術のしのぎをけずっていた時代があったことを思い知らされました。なおウィーンのコンサート・ホールに置かれたピアノは、いずれもベーゼンドルファーでした。さらに翌朝は、新王宮内に置かれた楽器コレクションの見物です。中世から現代までの楽器が、時代別に区分され、視聴覚設備を備えて展示されており、ウィーンで活動した作曲家と彼らが耳にした楽器の音を、総合的に実感できる楽しいひと時でした。

さて会議中に 2 本のコンサートが用意されて

いました。火曜日の楽友協会ブラームス・ホール、および木曜日のシェーンブルン宮殿内の劇場でのコンサートです。いずれも場所、その音響、使用楽器、演奏プログラム、さらにはウィーン流の演奏により、まさにウィーンならではの趣向が施されていました。楽友協会のコンサートは、所有楽器のデモンストレーションといった感じで、Domenico Pesarensis (ヴェネツィア、1546 作) のチェンバロ、1657 年と刻まれた製作者不詳のソプラノ・リコーダー、Daniel Achatius Stadlmann (ウィーン、1732 作) のバリトン、A. Walter (ウィーン、1810 作) と A. Stein (ウィーン、1825 頃作) のピアノ、弦楽器はチェロを除いては 18 世紀中頃から後半にウィーンで製作された楽器、そしてチェロは 1657 年にクレモナのアマティが製作し、W.A. モーツァルトも弾いたことがある楽器が使用されました。休憩時間には、舞台上で傍から楽器を見物することもできました。一方シェーンブルン宮殿劇場でのコンサートでは A. ウェーベルン、A. シェーンベルク、そして 20 世紀屈指の指揮者ブルーノ・ワルターの若かりし日のピアノ・クインテットというプログラムが、Atout により演奏されました。これは様々な国出身の若手演奏家グループですが、全員がウィーン演奏様式とウィーン・サウンドを身につけています。

すっかり嬉しくなり、13 世紀から 20 世紀初頭まで、この地を支配していたハプスブルク家の足跡を辿る気持ちになりました。その気分をいやが上にも増幅させたのは、私がウィーン 8 区、すなわちヨーゼフシュタット Josephstadt に、ホテルを選んだことにも一因があります。ここはリング通りの西側にあたり、市庁舎、国会議事堂、ブルク劇場、そして大学に近く、労働者や一般市民が多く住む地帯なのです。職人の工房が集まっていたと思われる、通りの名前が多く残っています。ウィーンで最古で、現在もまだ活動しているヨーゼフシュタット劇場、さらにはウィー

ンに出てきた A.ブルックナーが、1861年に音楽理論の修了試験を受け、試験官のひとりヨハン・ヘルベック Johann Herbeck より、「受験すべきは彼ではなく、自分である」と言わせた教会 Piaristenkirche (またの名は Maria-Treue-Kirche) があります。ホテルからヴィーン大学の前にあり、ベートーヴェンの遺体が安置された教会 Alserkirche までの道筋には、音楽関係者はもとより、小説家、詩人、文化人、ノーベル賞受賞者等が住んだことのある住居が目白押しで、メモを取りながらの楽しい通学となりました。セルビアやクロアチア出身の詩人等の名も多く、ヴィーンがヨーロッパで位置する場を、再確認させられました。またホテルの私の部屋の向いに見える楽しいレストラン Schnattl (オーナーのヴィルヘルムさんは、2008年に「本年のシェフに」選ばれ、びっくりとのこと。いとも庶民的な所でした)での食事、また内陸の暑い乾燥した地帯に合わせた飲料、白ワインをベースとし果物を漬け込んだポンチは、多くのカフェで供されましたが、私の夜の楽しみになりました。その他国立図書館、市立図書館、楽友協会での展示、水曜日の午後の遠足に選んだ「音楽都市ヴィーン・バス旅行」で見学した、ヨハン・シュトラウスの住居やシューベルト誕生の家、ベートーヴェンの散歩道や亡くなった家等、次から次への説明に聞き入りました。といった具合で、古き良き時代のヴィーンの生活を髣髴とさせる多くを、体験することができました。

さて会議の様子はのでしょうか。今回は主としてヴィーンに纏わるコレクションや、音楽活動等の報告を聞くことにしました。すなわちヴィーン市立図書館所蔵のシュトラウス一家の自筆や印刷による楽譜、楽友協会の図書館とコレクションの説明、ヴィーン宮廷楽団の小史と音楽コレクション、さらに「オーストリアの作曲家のアーカイヴとドキュメンテーション・センター」という総合タイトルのもとで、ザルツブルクのモーツァル

テウム図書館の紹介とその変遷、パリにあるマラー図書館 La Médiathèque Musicale Mahler à Paris (<http://www.mediathequemahler.org>)、1997年にヴィーンに移されたシェーンベルク・センター (<http://www.schoenberg.at>) に関する説明、DdT, Österreich の設立事情と小史、ヴィーンの出版者 J. Eberle(1845-1921)、ヴィーン・フィルの過去と現在等多くが語られ、それらの一部は図書館で現物を見ることができました。しかし情報としては、新しいものは少なく、「百聞は一見に如かず」とばかり、街を歩き回ることの多い楽しい会議でした。

また先頃は楽譜だけでなく、音楽に関するもの全般のデジタル化の流れの中で、作曲家の所有物、手紙、日記等もまとめて閲覧できるという、研究者にとっては非常に便利なページが多く公開されています。音楽理論家 H. シェンカーに関するページ (<http://www.schenkerdocumentsonline.org>) を御紹介しておきましょう。最近とみに興味の対象となっている、ショパンの楽譜校訂に関して、様々な初版を比較検討できるページ (<http://www.ocve.org.uk>) も、興味ある方には重宝かもしれませぬ。御覧くださいませ。

1850年代にフェルステルにより建築され、オーストリアハンガリー帝国の銀行として使用されていた殿堂でのフェアウェル・パーティーの後、私はブタペストに向けて、またひた走りです。あまりの暑さでぼんやりしたままの到着でした。フランツ・ヨーゼフ 1 世皇妃シシィ好みのカフェやオペラ・ハウス等、二重帝国ならではの景観を見学しました。今回の旅行の締めとして、選んだのはヴィーン博物館地区 ミュージアム・クォーターです。10以上のモダンな美術館やギャラリーの集合する場所には、古い伝統を抜け出そうとする息吹が感じられます。長い歴史に押しつぶされるのではなく、今を生きる姿にも感動しつつ、ヴィーンとの再会を誓いました。

IAML ウィーン国際大会に参加して

寺本 まり子

2013 年 IAML 国際大会の通知を受け取り、ホームページを開けた時、ウィーンとオーストリアの音楽文化を中心に置き、その音楽資料を網羅的、多面的、かつ徹底的に捉えたプログラムに心をひかれた。さらに、発表者の中に旧知の研究者の名前を見出したこともあり、日程を調整して参加することにした。1988 年の東京大会を別にすれば、1977 年のマインツ大会に村井範子先生の同伴者にして頂いて、まだ IAML には入会していなかったものの留学先のフランクフルトから現地参加させて頂いて以来のことである。さらに、申し込みをしてからウィーンに出発するまでの半年間に、論文指導の学生がヴォルフの資料に関して、たまたまウィーンの図書館のお二人、「市役所の中のウィーン図書館 Wienbibliothek im Rathaus」音楽部長のトーマス・アイグナー博士 (IAML オーストリア支部長) とウィーン国立図書館音楽部長のトーマス・ライブニッツ博士に大変お世話になった。まさに、このお二人がこの大会を中心に運営しておられたのである。

大会の初日 (7 月 29 日) は、ウィーンの三大音楽図書館に関するセッションで始まった。「三大」の中でも、今まで私になじみがなかったのが、前に述べた「ウィーン図書館」である。環状道路沿いの重厚な市役所の建物と音楽資料が結びつきにくかったのだが、この日のアイグナー博士の発表と翌日の見学で、認識を新たにした。この名称は「ウィーン市立図書館」と言った意味合いであり、しかも音楽部は「市役所のごく近くの」、建築家アドルフ・ロース (1870-1933) が自ら改装した邸宅の中にある。過去 200 年間の音楽に関するこの音楽部の楽譜コレクション (自筆譜と初版譜) は、ウィーンの音楽家に重点が

置かれ、その大部分が個人の寄贈や出版社の寄託 (ユニヴェルザール・エディツィオン、ドブリンガー出版社) によるものである。例えば資料の基礎のひとつには、芸術のパトロンであった N. ドゥンバが収集したシューベルトの自筆譜コレクションがあり、これは国立図書館のもものと合わせて 2001 年にユネスコの世界記憶遺産に登録され、さらにデジタル化されている (www.schubert-online.at)。また、ワルツ王シュトラウス一族の自筆譜や出版譜の、世界一と呼んでも差しつかえないコレクションは、元来はこの一族の子孫に由来するもので、音楽部の資料のもう一つの柱となっている。さらに、見学会では音楽部が昨年入手した、パガニーニの自筆譜も見せて頂いた。この自筆譜の左側にはパガニーニの筆跡、右側にはチェルニーの筆跡でパガニーニのヴァイオリン協奏曲第 2 番第 3 楽章のカンペネラの旋律が記されている。1828 年ウィーンでパガニーニの演奏を聴いたチェルニーは、この旋律を書きとめて変奏曲の主題にしようとしたがうまく行かず、結局パガニーニ本人に書いてもらったという。

次の、ウィーン楽友協会音楽資料室長ビーバ博士の発表も、ウィーンの音楽伝統を感じさせるものであった。世界の五大音楽コレクションの一つに数え入れられるこのコレクションの基礎は、ベートーヴェンのパトロンとして名高いドルフ大公のような芸術の後援者、あるいは E.L. ゲルバーのような音楽研究者から音楽文庫を入手することで形成されていく。しかし、何といたっても作曲家自身の音楽文庫によって、さらに充実したものとなった。その典型例が、ブラームスや友人たちに由来する膨大かつまとまりのあるコレクション (楽譜、蔵書、書簡、さまざまな図像や写真) であり、これは 2005 年にユネスコの世界記憶遺産に登録されたという。一方楽友協会のコレクションが 18 世紀以降のものに限定されないことも、今回改めて認識したが、それはこのような来歴によるのであろう。この認識は翌日以降のコン

サートと展覧会で、さらに強められた。7月30日（火）に楽友協会会館ブラームスザールで開かれた演奏会では、楽友会所蔵の16-19世紀の楽器で当時の音楽が演奏され、その楽譜も展示されたのである。その中にはタブラチュアで記譜された16世紀の曲やエステルハージ侯に仕えたトマジーニ（1741-1808）が作曲したバリトン、ヴィオラ、チェロのための《ディヴェルティメント》もあった。さらに8月1日（木）のオープンハウスでは、企画展「ヴェネツィアの音楽」と「IAMLのための特別展示」を見ることが出来たが、前者にはハッセの宗教曲《ミゼレーレ》の楽譜やストロツィによるモンテヴェルディのよく知られた肖像画も含まれていた。

3番目にライブニッツ博士が報告されたオーストリア国立図書館音楽部は、ウィーン三大図書館の中で最も古い歴史を持つ。この音楽コレクションは1498年に皇帝マクシミリアン1世（1459-1519）のもとで創設された宮廷楽団と歩みをともし、レオポルド1世（1640-1705）によって基礎が固められ、1826年に宮廷図書館となった。私は留学をしていた1970年代からアルベルティーナの上層階の音楽部で調査研究させて頂いているが、2005年に少し離れたモラール宮殿の上層階へ移転している。さて、ウィーンの音楽生活に欠かすことの出来ない団体のひとつは、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団であろう。7月31日（水）の朝には楽団長ヘルスベルク博士がスペシャルゲストとして、楽団の歴史、組織や運営について講演、それに続いてウィーン・フィル歴史資料室のカーゲル博士が資料室の成り立ちと所蔵されている重要なコレクションを要領よく説明された。この歴史資料室は1979年に日々の演奏会で使用する楽譜を収めた楽譜文庫から切り離され、1985年には楽友協会会館内に場所を得たが、2000年には新設の「音楽館 Haus der Musik」の中に移転した。ここには楽団創立以来のプログラム、ポスター、作曲家や

指揮者の遺品や写真、そして自筆楽譜（ブラームス、R.シュトラウス、プフィッツナー）や初版スコアなどが収められている。

初日には、ウィーンで活躍した作曲家たちの資料センターに関して、興味深い発表が続いた。ザルツブルクのモーツァルテウム国際財団は、未亡人コンスタンツェから自筆譜の寄贈も受けて1841年に設立された「大聖堂音楽協会およびモーツァルテウム」を前身としており、特に息子のフランツ・クサヴァー・モーツァルトから自筆譜、肖像画、ピアノ、蔵書の寄贈を受けて充実していった。ウィーン・シェーンベルク・センターは、南カリフォルニア大学のシェーンベルク・インスティテュートが閉鎖された後、紆余曲折を経て1997年に設立された。メードリンクのシェーンベルク・ハウスも同年にこのセンターに組み込まれ、修復が行われている。ヨーゼフ・ハイドンの音楽文庫は、遺産リストとしてばかりではなく、楽譜や書籍の全てがエステルハージ・アーカイヴに買い上げられ、今日ではブダペストの国立セーチャーニ図書館に所蔵されている。ハイドンの住まいが2度火災にあっているため1780年以降の資料が中心だが、彼自身の作品も含む200点以上の楽譜がある。その中にはハイドン



ウィーン国立図書館

に献呈された作品もあるが、C.Ph.E. バッハの歌曲やアルブレヒツベルガーの弦楽四重奏曲といったハイドンの学習の跡が伺えるものもあるため、今後の調査研究が待たれている。

7月31日(水)には、作曲家の活動をパトロンとして支えた貴族の音楽コレクションの発表も行われた。ベートーヴェンの後援者であったキンスキー一族、ロシアのロマノフ王朝、ハプスブルク・ロートリンゲン家のコレクションである。キンスキー家の音楽コレクション(373点の筆写譜と274点の出版譜)は、一族の音楽的関心と音楽活動を反映して主題的に、時代的に統一されている点が興味深かった。音楽生活の一側面として、楽譜出版や出版社もトピックとして取り上げられた。7月30日(火)には、全集版や叢書として、「オーストリア音楽の記念碑 Denkmäler der Tonkunst in Österreich」、マーラーの書簡、マルティヌー全集版の発表が行われた。「記念碑」は同じ構想で始められた叢書の中で、1893年から今日まで、100年以上にわたって唯一続けられているものである。歴史の流れの中で編集委員の交代や編集方針の見直しはあるが、オーストリアと言う地域的限定の中で、作曲家の記念年も考慮しつつ、全集版には含まれない作品、未研究の領域の作品を公的機関と出版社の支援を受けつつ今後も出版し続けるという姿勢に感嘆した。8月1日(木)の午前には、ウィーンにリトグラフ印刷をもたらしたヨーゼフ・エーベレ(1845-1921)に関する発表、18世紀末にウィーンの楽譜商ヨハン・トレグが作成した楽譜カタログの再評価の発表、ベートーヴェンの初期ピアノ・ソナタの初版譜に関する発表が続いた。さらに、その後に報告された「ドン・ファン・アーカイヴ・ウィーン」は、ホリツァー出版社の一部門として2007年に設立され、起源からダ・ポンテとモーツァルトによる《ドン・ジョヴァンニ》までのドン・ファン素材のドキュメンテーションと

研究、およびこのオペラの受容を扱うという。これも、ウィーンならではのアーカイヴと言えよう。

大会の間に企画された2回の演奏会の内の1回は木曜日に、シェーンブルン宮殿劇場で行われ、ヴェーベルンとシェーンベルクのほか、ブルーノ・ワルターのパiano五重奏曲が国立ウィーン音楽大学の室内楽グループによって演奏された。また、大会の中日の水曜日の午後には、音楽の都ウィーンならではの7通りの半日の遠足が企画され、私はウィーンの森を巡る「モーツァルトからシェーンベルクまで—メードリンクとバーデンへの遠足」に参加した。これも、実に周到に準備された、音楽に留まらず、土地と文化全体を懇切丁寧に解説する2階建てバスによる小旅行であった。

今回の会議は、発表ばかりではなく、見学会、演奏会、展覧会においてもウィーンを中心とするオーストリアの音楽資料、音楽遺産に重点が置かれ、西洋音楽史の研究者にとっては、非常に有意義であった。貴重な1次資料そのものに関して、その来歴や資料としての価値等に関しては、ヨーロッパの音楽図書館員の造詣は深く、自らの音楽文化に対して誇りを持って研究を進めている様子が伺われた。8月2日(金)のバイエルン州立図書館音楽部の発表のように、1次資料は保存の観点からもデジタル化が必要であり、RISMのデータバンク Kallisto が整えられ、「音楽学バーチャル・ライブラリー Vituelle Fachbibliothek Musikwissenschaft (Vifa)」が構築されている。しかし、そのような時代だからこそ、全てコンピュータの画面で済ませるのではなく、実物、生の資料を見ることが大切であり、人間的な交わりも求められよう。今回は貴重な情報を一方的に受信するばかりであったが、今後はそれらを自身の研究と教育に生かして、機会を見て発信していきたいと考えている。

20年連続参加の IAML2013

40年ぶりのウィーンで

藤堂 雍子

今回は、調べたいこともあって会期前7月24日に到着した。目的の自筆譜は楽友協会アーカイヴにはなく、7-9月は休館中であることがI. Fuchs、O. Biba 両氏とのメール往復で分かったので、国立図書館別館にある音楽部門閲覧室に向かう。端末と請求やレファレンスのカウンターと、閲覧用机があるだけのシンプルな仕様で、端末で見つけた資料を請求すると2-3時間待ち、資料をパスポートと交換で渡され、閲覧できる。出版楽譜と若干の自筆資料を請求すると、一週間は資料をリザーブできる。自筆譜など一部の貴重な資料は（音楽資料も含め）国立図書館本館内の閲覧室でのみ利用と定められている。ヘレンガッセを数分歩いたミヒャエル教会前広場に隣接するヨーゼフ広場へ入口がある本館まで向うことになる。夏は、開館時間も週末を除く半日に限られているので、複数の資料を閲覧するには、あちこち移動を覚悟するしかない。目的を果たすには、十分な時間がないので、2日間通って、次期に託すか、ウィーン在住で事情を共有できる知人を見つけるしかないと悟る。勿論、複写サービスも可能だが、研究目的に必要な範囲を、一度は、自分の目で特定してから依頼するべきであろう事態も予測でき、これも今後の課題となる。米国やフランス国立図書館などに比して、貴重資料の閲覧は、保存管理優先の比重がかなり高い。資料そのもののデジタル化もまだまだであることも察知できた。

一方久しぶりのウィーンは何より、交通の便が格段に現代化され、飛行場は東あるいは南ヨーロッパへのハブ空港として昨年新築され、地下鉄も刻々進化している。無論急ぐことが常に最良で

はない。

週半ばエクスカーションで出かけたアイゼンシュタットは、ハイドンが音楽生活の大半を通じて仕えたハンガリー西部国境に近いエステルハージ候の館のある丘陵地で、ウィーンからバスで高速道を1時間半ほどだが、この48キロは、当時は6人乗り馬車を連ねて丸一日駆け、演奏家や聴衆を館内のハイドン・ザールに集められる行程で、ハイドンの多くの管弦楽作品やオラトリオを初演したという。ここは、当時東ヨーロッパで最も音響優れたホールと言いつづえられ、館に近い彼の家も、墓所のある教会もこの地にあり、コンパクトにアクティブだった宮廷楽長ハイドンの音楽生活を感じ取ることができる。ウィーンの街の生活をその昔から今も支えている東欧風の貯水槽塔が途上にそびえていたのも印象的だった。

さて、カウンスル・ミーティングや大会直前でメーリングリストで議論の的となっていた IAML の規約に関わる組織再編については、金沢支部長の所感が述べられることだろうが、常に議論は進行形である。改選後の新ボードメンバーは既に公表されており、久々に米国から選出された会長は、RILM 事務局長との兼務になる。2015年ニューヨークで開催される IAML 大会への布石となるだろう。また、各国支部代表が、常に国を掌握することは難しいとドイツやイタリア支部長から相次いで表明され、メディア社会の急激な変化や世代交代の趨勢が今日なお在ることに変わりない。

以下、いくつか、記録しておきたいことを順不同で列挙しよう。（ ）は発表日

1) オープニング・セッションは、「ウィーンの音楽図書館」。市立図書館、楽友協会アーカイヴ、そして国立図書館音楽部門の「顔」が勢ぞろいした。Th. Aigner、Th. Leibnitz 両氏は常連だが、日本の研究者にはよく知られている O. Biba 氏は、

IAML ではむしろ珍しい登壇であった。フランス革命後大きく変化するヨーロッパ、ウィーンで列国会議が催された 1814 年前後に、ウィーンの富裕な音楽愛好家である貴族や銀行家たちが集り演奏会を催し、楽友協会設立 (1812)、音楽学校設立 (1818) の機運が芽生え、アーカイヴや、楽友協会の建物開設 (1931)、ウィーンフィル設立 (1842)、大ホール (1870) が実現していった。1848 年の三月革命によってさらに「市民の力」に比重がかかる時代に楽友協会が成長した。(7 月 29 日)

2) フランス国立図書館音楽資料目録の電子化「リシェリユ・プロジェクト」がほぼ 75% 終えつつあると報告されたのは、2013 年 1 月末だったが、国立図書館音楽部門に移管し別置したままの「パリ音楽院目録」プロジェクトは、2014 年から 2017 年頃までにコンバートされる見通しが明らかになった。フランス音楽分野で重要な内容を含む。(7 月 31 日)

3) 中国では、北京、上海、台北の音楽大学、音楽院図書館のコレクションを共同リソースとして活用する動きが始まっている。2012 年春以降 3 回の会合を経て計画を練り実現への契約を交わす段階に至っている。推進には米国 IAML メンバーも参与し、政治枠を越え中国音楽文化へのアクセスビリティ向上が目論まれている。(7 月 31 日)

4) Clemens Hellsberg 氏 (ウィーン・フィル楽団長、1997 年より現職にありヴァイオリン奏者で音楽学者) が、プレナリ・セッションに登場し、ウィーン・フィルの歴史と、財政難にある現状も吐露したが、準備した資料や画像が会場の機材の不具合で十分に機能を発揮できず、せめて音響十分なオーケストラ録音を聴いていただく、と一時を大音響で楽しませてくれた。謝意を込め、会場から盛大な拍手が送られ、前日夕刻の楽友協会 (ブラームス・ザール) におけるコンサートでのホールの響きと周到なプログラムと



ブラームス・ザールでの演奏会 (休憩時間)

ともに、忘れ難いものとなった。(7 月 31 日)

5) 教育機関図書館部会では、コレクション形成に関するラウンドテーブルを設け、司会に加え米国 MLA の会長がモデレーター (助っ人) という変形スタイルで寄贈コレクションや、固有のコレクション形成について多面的な観点が提供された。来年アントワープでの年次大会が予定されているが、国内が二分化するほど事情が複雑な中で、支部長、IAML 副会長兼教育機関図書館部会座長 (ブリュッセル王立音楽院) 持前の柔軟さで、乗り切ってほしい。(8 月 1 日)

6) 2013 年はブリテンの生誕 100 年でもある。

1980 年初めて IAML に参加したケンブリッジ大会でのエクスカーションで訪れた海辺のオールドバラは、彼の住まいと音楽祭を毎年開催する場所で、彼のパートナー、テノール歌手 P. ピアーズとのコレクションを中心に、元からあった蔵書図書室がアーカイヴ・センターとして新たにオープンした。住居レッドハウスに隣接している。詳細は、大会準備用レジュメでチェックできる。同セッションは、「作曲家たちとその図書館」と題され、ハンガリー国立図書館エステルハージ・アーカイヴが、米コーネル大学留学歴のある Balazs Mikusi 氏から報告された。オーストリア領内にあったハンガリー出身貴族宮廷の楽長ハイドンのコレクションである。ウィーン IAML 大会ならではの取り組みで、詳細な情報は、研究者にとって貴重だろう。ハイドンと同時代作曲家

たちの手稿も 1/4 含み、作曲家の当時の関心を知る上でも希少なジャンルであろう。他にクラクフのヤギェウォ大学にあるパデレフスキーの名を冠した 19 世紀から 20 世紀ポーランド音楽ドキュメンテーション・センターも紹介された。(7 月 29 日)

7) RILM セッションでは、長くイタリア RILM スタッフの Pinuccia Carrer(元会長 Massimo 夫人)が、先年亡くなったばかりの Verdi 研究者、音楽文献学者で、彼女の師でもあった Pierluigi Petrobelli (1932-2012) の文献を踏まえ、リソルジメント(イタリア統一運動)と平行にオペラの隆盛を極めた時代や、第二次大戦中のファシズムに抵抗した Claudio Sartori (1913-1994) が先導した目録や書誌の概歴を回顧した。(7 月 30 日)

同じイタリアの Federica Riva は、「オンライン目録と協同」セッションで、先人の Sartori のレッスンをフォローしていくのか? と別のセッションで現代の協同目録に言及している。(7 月 31 日) 2016 年ローマでの IAML 開催を準備することが彼女に課せられていることをお伝えし、筆をおこう。



ハイドン・ハウス

初めての国際大会

IAML Vienna 2013

大和 紘子

昭和音楽大学附属図書館に勤務する大和紘子と申します。この度、初めて国際大会に参加させていただきました。私は、昭和音楽大学附属図書館で働き始めてから毎年 newsletter でこの国際大会の報告を楽しみに読んでいましたが、まさか自分が参加できるとは夢にも思いませんでした。昭和音楽大学では、2012 年度に司書課程が開設されました。司書課程の学生に対応するためにも、現在の本学図書館に欠けている知識や自分の経験を補う必要があります。そのためには、国内の研修や自己研鑽だけではなく、より広い世界を知る必要があると考えていました。そこで、IAML 国際大会が有益な機会になると思い、ぜひ参加したいと思うようになりました。すでに年度の参加費補助申し込みは終了していたにも関わらず、皆様が親身に相談に乗ってくださいました。IAML 日本支部の方々、本学の岸本宏子先生と 2004 年 Oslo 大会に参加した金井喜一郎さん、職場の皆様に、この場を借りて改めて感謝申し上げます。初参加で、英語力も乏しいため、会議の様子を正確に報告することは難しいですが、私が肌身で感じた「IAML 国際大会」を報告させていただきます。

初めての一人旅、語学力不足など、多くの不安や心配と共に成田を出発し、ウィーンに到着したのは 7 月 28 日現地時間の 16 時頃でした。空港から CAT (City Airport Train) と地下鉄を乗り継いで、私が泊まるホテルとメイン会場の最寄りである「Rathaus」駅に到着しました。地下鉄の階段を上がるとヨーロッパの美しい街並みが広がっていました。ホテルに無事に着いた安堵感とこれから始まる会議への緊張や期待を抱き

ながら、夜のオープニング・レセプションに向かいました。レセプションは、美しいゴシック様式の誌の市庁舎内のオープンスペースで行われました。会場には、お酒や軽食が用意され、誰もが気さくに楽しめるパーティーといった雰囲気でした。IAML 会長の挨拶があり、続いてジャズシンガーが歌う《All of me》でライブがスタートしました。会期中のウィーンは連日歴史的暑さに見舞われましたが、この夜は特に暑い熱気に包まれていました。

翌日から、ウィーン大学で各種セッションが始まりました。セッションは 1 枠 90 分で午前 2 枠、午後 2 枠行われました。合間には 30 分の〈Tea or Coffee〉の時間やランチタイムがあり、ホールで自由にお茶とお菓子を頂くことができました。また、音楽出版社などの企業ブースが設けられていたり、ポスター・セッションが行われていたりしていました。この様なスケジュールのなか、参加者同士が交流し、皆がこの会議を楽しみにしている様子がうかがえました。セッションはスライドや音源を使い、多くは英語で行われました。アブストラクトが事前に Web 上にアップロードされていたので、当日の配布資料はほとんどありませんでした。以下に、私が参加したセッション、演奏会、見学会などについて報告させていただきます。

【セッション】

オープニング・セッションの〈Music libraries in Vienna〉では、ウィーンを代表する音楽図書館のコレクションやアーカイブの紹介がありました。開催地ウィーンの魅力があふれる内容で、別枠で図書館見学のプログラムも用意されていました。この他にも、Mozart, Mahler, Schönberg のアーカイブの紹介など、ウィーンならではのプログラムが多く用意されていました。

〈Integrating music research skills into the undergraduate curriculum〉は、インディアナ

利用できるプログラムを作成しているそうです。アメリカは、総合大学内の音楽学部が多い点や、図書館が大学内に複数ある点など、日本の多くの音楽図書館がおかれている環境とは異なりませう。国の教育環境に合った図書館の在り方や海外の音楽専攻学生の学習プログラムを知ることができたのは有意義でした。

一方、〈Further impressions: Digitising the annotated catalogue of Chopin's first editions〉は、CFEO (Chopin's First Editions Online)、OCVE (Online Chopin Variorum Edition) の紹介を中心に今後の展望も含めた発表でした。ショパンの初版楽譜はフランス語、ドイツ語、英語と様々な版で内容が異なる点が多くあります。網羅的なカタログ作成には、ヨーロッパやアメリカの図書館、プライベート・コレクション資料などの長年に及ぶ調査結果を詳細に記載する必要があります。オンライン・カタログについては、世界中のどこからでも、書誌情報だけでなく画像にもアクセスでき、今後はさらにサイト間の相互リンクや注釈の表示など、機能的な面でもより効果的になっていくようです。

【演奏会】

楽友協会ブラームス・ホールで、古楽器の演奏会がありました。使用楽器は楽友協会コレクションで、どれも美しい響きが印象的でした。ホール後方には、同コレクションが所有するスケッチや自筆譜などが展示され、それらの作品が演奏会のプログラムになっているという素敵な演出でした。また、シェーンブルン宮殿内にあるウィーン国立音楽大学のホールでは、Webern, Schönberg, Walter の作品を聴きました。楽友協会での演奏会とは対照的に 20 世紀の音楽を楽しむことができました。どちらも、IAML が企画したもので、休憩時間にステージ上で楽器を見たり、演奏者と話したりと、他では味わえない演奏会でした。

【見学会・エクスカージョン】

〈Austrian National Library〉〈Public Library Vienna〉〈Wiener Musikverein Archive〉の3つの図書館見学会に参加しました。ヨーロッパ建築の美しさや古い蔵書の迫りに圧倒されたのはもちろんですが、ウィーン市立図書館の充実した音楽の蔵書には一番驚きました。作曲家別に配架された楽譜、オペラのスコア、全集など、全て開架になっており、誰もが簡単に見ることができます。日本の公共図書館ではこのような光景は見受けられません。図書館の蔵書からも文化の違いがわかり、芸術が市民に自然に根付いていることを感じました。

エクスカージョンでは、ウィーン市内の音楽遺産を巡る〈Musical Bus Tour of the City〉に参加しました。市内に点在する音楽家のモニュメントや Johann Strauss の住居、Schubert の生家、Beethoven が散歩した公園などを巡り、写真でよく目にするような有名な場所を実際に見てきました。作曲者のスケッチや自筆譜を見て多くの感動がありました。また、音楽資料以外にも手紙、絵、衣服などの私物や部屋を実際に見ることで、当時の生活の様子や国の歴史にも触れることができました。

5日間の大会は瞬く間に過ぎ、プログラム最後を飾るフェアウェル・ディナーは、Palais Ferstel という素晴らしいホールで行われました。参加者の多くはパーティーの装いでしたが、かしまった緊張感はなく、終始和やかで賑やかな雰囲気の中、生演奏をバックに美味しい料理を頂きました。宮殿の中にいるような非日常的な時間はあっという間に終わり、名残惜しさを感じながら、日本支部メンバーと一緒に歩いてホテルに帰りました。

IAML 国際大会には多くのライブラリアンが参加していて、彼らの士気の高さや豊富な知識、専門職としての地位の高さを感じ、良い刺激になりました。同じアジアでも中国からの参加者は多

く、若い方も以前から参加しているとのことでした。香港大学音楽図書館の方とは、一緒に食事をしたり、移動したりする機会に恵まれ、語学力不足のため十分な会話はできませんでしたが、とても嬉しい出会いとなりました。

今後は日本からもライブラリアンの参加が増えることを期待しています。私は、初参加の不安が多くありましたが、日本支部の方々が色々な場面で助けて下さいました。皆様とお会いし、交流が図れたことが本当に貴重な体験となりました。国際大会に参加してみたい想いや興味をお持ちの方は、ぜひ次回のアントワープ大会に参加してみてください。どんな方でも不安や懸念事項は多々あると思いますが、必ず、その悩みの分だけ、充実感や今後の活力を得ることができます。私自身、図書館に欠けている知識をどこまで習得できたか自信はありませんが、経験を補うといった面では想像以上の収穫がありました。世界に目を向けるということは、自分自身で、世界の現場に参加することだと確信しました。

また参加できる日を楽しみに、今回得た知識や活力を日々の業務に活かしていきます。このレポートには書ききれないほどの経験をさせて頂いたことに、改めて感謝申し上げます。



ウィーン楽友協会大ホールにて
(右から荒川副支部長、藤堂雍子氏、筆者)



事務局だより



アントワープ国際大会と参加補助金希望者募集

本年の IAML 国際大会は、7 月 13 日～18 日、ベルギーのアントワープで開催される。大会プログラムも発表され、準備が進められている。http://www.iaml.info/activities/conferences/antwerp_2014

日本支部では「初めて国際大会に参加する個人会員（非常勤講師等の研究者を含む）および団体委員の各機関に所属するメンバー」を対象に、国際大会参加希望者への参加補助金を交付しています。申請締切は 5 月 20 日。詳細は事務局長長谷川(yumikoha@mountain.ocn.ne.jp)宛お問合せ下さい。

日本支部第 55 回研究例会

昨年 11 月 30 日（土）に開かれた第 55 回研究例会では、コロンビア大学音楽芸術図書館のエリザベス・デイヴィス氏による講演「コロンビア大学音楽芸術図書館—研究大学環境下の一分館」が行なわれた（於・東京音楽大学付属図書館）。コロンビア大学音楽芸術図書館はそれほど規模の大きな図書館ではないが、その多様な活動は目覚ましいものである。講演は山田晴通氏の通訳で進行し、フロアとの意見交換も活発だった。例会終了後、池袋の居酒屋で楽しい交流のひと時を過ぎた。（詳細次号）

文化庁委託「日本の音楽資料」のデータベース化に向けて

平成 21、23、24 年度に実施された「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査研究は、全国調査を終え、国立国会図書館での公開に向けて新たな作業に入った。委員会（久保田慶一委員長）の構成は 24 年度と変わらない。今回の主な業務は、全データのチェックで、参加館へのデータ送付と了解を経たのち、国会図書館へ納入となる。国会図書館では館内調整ののち、一般公開される。

近代デジタルライブラリー「館内限定資料」が公共図書館、大学図書館で閲覧可能

国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」は一部館内限定閲覧であったが、本年 1 月 21 日より絶版等の理由で入手困難な資料を対象に、図書館向

け送信サービスが開始された。開始時点での対象資料数 131 万点。公共図書館、大学図書館などのうち、利用申請の上、承認を受けた機関での閲覧が可能となる。現在参加館は少いが徐々に拡大して行くであろう。詳細は国立国会図書館 http://www.ndl.go.jp/jp/library/service_d 参照。

シンポジウム「日本の管弦楽作品演奏譜における課題と展望—演奏譜は文化だ！」

12 月 7 日、東京音楽大学付属図書館とオーケストラ・ニッポニカ共催により標記のシンポジウムが開催された。オーケストラ・ニッポニカが演奏してきた楽譜、録音、記録が同館に寄託されることになったことを記念して開催された。演奏譜をめぐるシンポジウムとあって、参加者もオーケストラ関係者が多く、ディスカッションでも熱い応答が続いた。詳細は同館『ライブラリー・レポート』創刊号に掲載予定。

次世代コンテンツ推進機構 (JCPO) ワークショップ「日本の出版楽譜—目録作成を中心に」開催（予告）

来る 3 月 26 日（水）、第 2 回 JCPO「音楽資料・情報担当者ワークショップ」が開催される（於・東京音楽大学付属図書館）。日本の出版楽譜の固有性に留意した適切な整理法を検討・提示するもので、目録実習もおこなう。内容は次の通り。

1. 「日本の楽譜出版——歴史と特徴」（講義）
2. 「楽譜目録法」解説
3. 目録実習

講師 林淑姫、長谷川由美子

主催・JCPO、東京音楽大学付属図書館。

後援・国立国会図書館（予定）。協力・日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会。受講料 2000 円。

お問合せ・申込は kokucheese.com/event/index/ 146909/ まで。

Newsletter—国際音楽資料情報協会日本支部

第 49 号

2014 年 1 月 30 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5

東京音楽大学付属図書館内

<http://www.iaml.jp>